

芥川龍之介と田端

岩崎みどり（田端文士村記念館研究員）

芥川龍之介は、人生の最盛期の大半を田端で過ごし、数々の代表作を同地で執筆しました。また室生犀星が「王様」と賞したように、田端文士村の中心人物としても活躍し、龍之介を尊敬する文士・芸術家たちが田端に転入するきっかけを作りました。今回は、その交流を中心に、作品世界もご紹介します。

芥川龍之介（あくたがわ りゅうのすけ）

〈明治25(1892)年3月1日～昭和2(1927)年7月24日〉東京京橋生まれ。

別号・澄江堂主人など。俳号・我鬼

大正3年10月、田端435番地(1-20)に転入。

代表作：『羅生門』『戯作三昧』『地獄変』『齒車』など。

★田端以前

芥川龍之介は、明治25年、牛乳販売業耕牧舎を営む父・新原敏三^{にいばらとしぞう}、母・フクの長男として京橋区入船町（現・中央区明石町）に生まれました。

生後7ヶ月で、フクが突然心の病にかかり、龍之介はフクの兄・芥川道章^{どうしょう}、儔夫婦^{とも}のもとに引き取られました（明治37年、正式に養子となる）。芥川家は本所区小泉町（現・墨田区両国）にあり、代々江戸城の奥坊主を勤めた士族の家柄でした。龍之介の教育にあたった伯母フキをはじめ、当時東京府の土木課に勤務していた養父・道章も、一中節、南画、俳句をたしなむ趣味人で、文学・芸術を好む家庭環境でした。また江戸情緒あふれる隅田川界隈の環境は、龍之介の人格形成や文学基盤に深い影響をもたらしました。

龍之介は幼少時代の思い出とともに隅田川への愛着を作品中で書いています。

自分は、大川端に近い町に生まれた。家を出て椎^{しい}の若葉^{おお}に掩はれた、黒塀の多い横網の小路をぬけると、直^{すぐ}あの幅の広い川筋の見渡される、百本杭^{かかし}の河岸へ出るのである。幼い時から、中学を卒業するまで、自分は殆^{ほとんど}毎日のやうに、あの川を見た。(略)水泳を習ひに行く通りすがりに、嗅ぐとなく嗅いだ河の水のほほも、今では年と共に、親しく思ひ出されるやうな気がする。

自分はどうかうもあの川を愛するのか。あの何方かと云へば、泥濁りのした大川の生暖い水に、限りない床しさを感じるのか。(略)唯、自分は、昔からあの水を見る毎に、何となく、涙を落としたいやな、云ひ難い慰安と寂寥とを感じた。完く、自分の住んである世界から遠ざかつて、なつかしい思慕と追憶との国にはいるやうな心もちがした。此心もちの為に、此慰安と寂寥とを味ひ得るが為に自分は何よりも大川の水を愛するのである。

（『大川の水』大正3年）